

再び甲子園へ

本市出身・野田海人選手

2022年センバツ（春の甲子園）出場



九州国際大学付属高等学校野球部主将・正捕手。
昨年の秋季大会では、打率.396、本塁打3本という結果を残す。また強肩の持ち主で、投手もこなし最速146キロのストレートを持つ。

小さい頃は、やったことがないことにチャレンジすることが苦手で、でも一度好きになると、とことん熱中する、野田選手はそんな子だったといえます。野球は従兄の影響で自然と好きになり、小学5年生の時に手鎌少年ソフトボールクラブに入部。「特別目立つことのない普通の子でした。ただ、練習は大好きで父親とよく自主練していました」と母・雅美さん。そんな野田選手に転機が訪れたのは中学3年生の時。中学では、硬式野球チーム・高田ファイターズ（みやま市）に所属し、スローイングの良さを監督に見い出され、2年生から捕手



上／手鎌少年ソフトボールクラブ時代。あどけなさが残ります 下／中学校時代は硬式クラブチームの高田ファイターズへ。2年生から捕手に

を任されることになります。しかし、大きな成績を残せず不完全燃焼だったため、卒業まで練習に参加したそうです。父・弘二さんは「卒業までしっかり練習を続けたことで、技術面・精神面ともに成長できた。あの半年間は海人にとって重要な時期だったと思います」と話します。

そのおかげで、進学した九州国際大学付属高校では1年の秋からベンチに入り、正捕手の座を掴みますが、ここで、再び転機が訪れます。当時のエースが150キロ近い球を投げ、それを受け続けたため、どんな球でも対応できるようになったといえます。2年生



上／鋭い強力なスイングで強力打線の一役を担っています 下／自慢の強肩で相手の進塁を阻止

の夏は、甲子園出場が濃厚だと言われますが、ベスト8どまりに。「とても悔しかった。来年こそは…！と強く思いました」と話す海人選手は、主将を任せられることになりました。2年次からレギュラーで試合に出て、一番悔しい思いをした経験を生かしてくれるはず…というのが選出の理由だったそうです。

しかし、当初は練習試合で負け続けるなど、九国大最弱のチームとまで言われたことも。いろいろ悩んだ結果、先輩・後輩の壁をなくし、部員全員から意見が出やすい雰囲気になるよう心掛け、いつの間にか超強力打線が武器の強豪チームとまで呼ばれるほどになります。強力打線は令和3年秋の九州大会で爆発し、準々決勝、準決勝をコールド、決勝も大差で勝利し、甲子園への切符を手に入れました。

甲子園のグラウンドに足を踏み入れたときは「ずっと憧れてきた球場。緊張よりも、早く試合がしたい」という気持ちになったといいます。

初戦でサヨナラ勝ちを収めチームは勢いに乗り強豪広陵高校にも勝利。3回戦の浦和学院は優勝候補でもあったため、楽しんで自分たちのプレーをやるうと臨みますが、接戦ながらも最後に力尽き敗戦します。「打線が力を出し切れず、エースの香西

最後の夏。 そして、 次の夢へ…



に頼りっきりだった。悔しい気持ちでいっぱいでした」と、気持ちはずぐに夏の大会に向かったといいます。

最後の大会の前に、週末は毎週のように練習試合の応援に出かけているご両親。「野球を始めた頃はスローイング



主将・正捕手とチームの要として奮闘

が悪く、ひたすらキャッチボールをしていました。その頃を考えると、よくここまでできたなあと思います。夏の大会を目の前にして、見えないプレッシャーと戦っていると思いますが、悔いのないように力を出し切ってほしいです」と話しました。

将来の夢はプロ野球選手になることだという海人選手。最後に力強く抱負を語ってくれました。「小さい体で活躍しているホークスの甲斐選手のようにになりたい。でも今は、夏の大会のことだけを考えています。たくさんの人に支えられてここまでくることができました。全ての人に感謝して、高校最後の夏を仲間と一緒に悔いのないように戦いたいです」